地理空間　6-1　47-61　2013

# タイ・サムットサーコーン県におけるミャンマー人の適応様式

小野澤泰子
筑波大学大学院生

本稿では，1980年代後半以降，タイに増加しつつあるミャンマー人を対象に，かれらのホスト社会における適応様式を明らかにすることを目的とした。そのためミャンマー人の社会属性・居住様式・就業形態・生活様式に着目しながら分析した。対象地域は，タイでも最大規模のミャンマー人の人口を有する，バンコク郊外のサムットサーコーン県マハーチャイ町およびその周辺である。ミャンマー人の集住地区は，市街地周辺部における小規模居住地区，工場地帯における中規模居住地区，そして市街地中心部に位置する大規模居住地区の3種類に区分して検討を加えた。市街地周辺地区においては，一つのエスニック集団が集住する，引き寄せ型の移住が顕著にみられた。大規模居住地区では様々なエスニック・ビジネスが展開され，多様な属性のミャンマー人が居住しているが，一定数は，タイ社会への順応度合に応じて他地区に移住していることが明らかになった。
**キーワード**：ミャンマー人移民，移民コミュニティ，適応様式，タイ，サムットサーコーン県

## Ⅰ　はじめに

1980年代に高度経済成長期を迎えたタイでは，隣国から多くの外国人労働者が流入しており，外国人労働者の現状把握と対応がタイ国家として重要な政策課題とされている。なかでも推定100～200万人とされるミャンマー人[1]労働者は重視されており，その集団に焦点を当てた研究が1990年代以降，多分野から進められ蓄積されてきた。

浅見（2003）は，タイ人による労働者問題に関する研究を，所管する政府の機関が主体となり調査をしたものと，研究機関の研究者が調査したものとに大きく2種類に分けられるとし，政策提言を前提としない実態解明に重点を置いた後者の研究結果に着目すべきであると述べている。

1997年にマヒドン大学のInstitute for Population and Social Research（IPSR）が行った外国人労働者に関する共同調査では，タイにおける外国人問題について整理し，法律制度や統計学等の各分野から分析をしている。Archavanitkul et. al.（1997）は，タイでは在留外国人の数を出身国別およびタイプ別に推計しているが，「外国人労働者」の範囲が明確に定義されていないため，統計を取り扱う際は慎重に分析するべきであると述べている。Saisunthorn（1997）は，外国人労働者に関する法規・法令について概略的検討を行っている。1992年以降，不法に入国した外国人であっても，一定の条件を満たし，政府が定めた法規に従って登録した者については，一定期間タイ国内で働くことが認められ，不法入国外国人のタイ国内での就労の事実上の合法化が行われてきたことを指摘している[2]。このような曖昧な制度のもと外国人労働者を受け入れることは，外国人労働者にとってもタイ社会にとっても否定的な結果をもたらしていることを考慮し，早急に非熟練外国人労働者を正規に受け入れるための法整備を行うべきことを提唱している。

1997年以降は，チュラロンコン大学Asian Research Centre for Migration（ARCM）がタイにおける外国人労働者問題の総合的な調査研究を進め，この問題の議論を深めている。ARCMは，2001年にタクシンが同国の首相に就任して以来，多くの外国人労働者を受け入れられる政策が採られたことに焦点を当て，ミャンマー人

労働者の法律上の身分の変化について議論している（Chantavanich and Vungsiriphisal et. al., 2007）。この調査報告では，ミャンマー人への丹念なインタビュー調査を通して，制度改正にもかかわらず過酷な生活状況に取り残されている事例等が示され，ミャンマー人移民の子どもが直面している人権・教育に関わる諸問題などの実態報告もなされている（Chantavanich and Laodumrongchai et. al., 2007）。

しかしこれらの研究では，ミャンマー人の生活状況一般を調査するにとどまり，彼らがタイのホスト社会においてどのようなコミュニティを形成しているかについては十分な解明はなされていない。そのためミャンマー人のタイ社会における適応戦略に焦点を当てた研究が必要とされている。適応戦略とは「ホスト社会の中で居住空間を確保し，仕事を確保して生計を維持していくための方法」であると Yagasaki（2003）は説明している。それらを解明するためには移民の居住空間，民族組織，就業選択という三つの形態に着目する必要がある。この観点に焦点を当てた研究は，2000年代後半以降，主に外国人研究者によって推進されてきた。

藤井・レーワット（2007）は，チョンブリー県におけるミャンマー人の就労形態と生活様式から，タイ社会との摩擦が大きい集住型の「現代的コロニー」と，タイ社会に溶け込む分散・拡散型の非可視的なコミュニティの二つのタイプがあることを指摘している。また，タイ社会においてこれらのミャンマー人がタイ人と共生するためには，人権の視点から，NGO 組織等による医療・教育の支援が有効な手段であるとも述べている。橋本（2007）はバンコク近郊地域のミャンマー人労働者をエスニック集団による帰属意識の視点から分析している。タイに隣接し歴史的にタイとのつながりが深い地域出身のモン（Mon）人・カレン（Karen）人・シャン（Shan）人などのエスニック集団は，自らのエスニック・アイデンティティを使い分けながら，タイ社会での就労や生活の場でエスニック・ネットワークを活用していることに着目し，タイ社会では周縁化されていない「モン」アイデンティティを活用しつつ，タイ人化を目指すモン系ミャンマー人の適応戦略を明らかにした。また Aung（2007）は，チン（Chin）人・カチン（Kachin）人といったエスニック集団も独自の組織を立ち上げ，バンコクにおいて他のエスニック集団に属すミャンマー人より優位な状況にあると指摘している。しかし，その他のエスニック集団所属のミャンマー人たちには後ろ盾となる組織がないため，タイの NGO 組織による医療と教育の支援が重要であると述べている。これらの議論から，タイ社会でミャンマー人の就業選択や生活様式に，エスニック集団による差異が強くみられることが明らかにされ，今後のミャンマー人コミュニティ研究において重要な論点を提供している。

しかし，これまでの研究ではサンプルの偏りをなくすために，地域的に非常に広い範囲に居住する多様な職種のミャンマー人を対象に調査をしているため，ミャンマー人の適応戦略の地域性を空間的に分析する試みはまだなされていない。対象地域を限定し，その中でのミャンマー人の適応様式について集中的な調査研究を進めることが残された重要課題となっている。

上記の先行研究に関わる認識を踏まえ，本稿では，限定された選定地域内におけるミャンマー人の適応様式の現状を検討することを目的とする。また，一般的な移民社会との比較において，対象のミャンマー人のコミュニティがどのような段階にあるのかを考察する。なお本稿で使用する適応様式とは，Yagasaki（2003）が「エスニック集団の適応戦略」の論考において展開した概念を援用

し，移民の居住空間と就業選択の二つの形態[3]に加え，生活様式[4]に着目した，移民の生計維持の様式を指す。

ミャンマー人のコミュニティが形成される地域は低賃金単純労働に対する労働力需要が高く，外国人労働者へのプル要因が強いこと，外国人労働者コミュニティ内に多様なエスニック集団が混在していることが特徴として挙げられる。そこで分析手法に関して，貝沼ほか（2009：192-215）が明らかにした，地域開発が進むフィリピン・マニラ郊外の空間的な社会構造と労働者の分業化の先行研究を参考としつつ，タイの地域産業構造分析を試みる。また矢ケ﨑・二村（2005）がアメリカにおける東南アジア系社会を研究する際に用いた分析方法も関連先行研究として援用する。

調査対象地域は，バンコクに次ぎタイ国内で最もミャンマー人が多いサムットサーコーン（Samut Sakhon）県の中心部，マハーチャイ（Maha Chai）町およびその周辺地域とする。この地域では1980年代後半以降，タイ国内でも最大規模のミャンマー人コミュニティが形成されており，タイ人からも「リトル・ビルマ」と呼ばれるほど幅広く認識されている。

本稿の目的を達成するために，以下のような手順で論述を進めた。まず，タイにおけるミャンマー人を理解するために，現在のタイにおける移民の流入傾向について概観し，ミャンマー人がタイに流入する要因と彼らのエスニック集団の種類について記述した。次に，サムットサーコーン県におけるミャンマー人とNGO組織の概要を述べ，調査地域内で異なった特徴をもつ代表的なミャンマー人居住地を3地区取り上げ，それぞれの地区のミャンマー人コミュニティの適応様式について記述し，その差異について考察した。

ミャンマー人の適応様式を研究するにあたり，彼らの就業や生活に大きく関わっているNGOラックスタイ（Raks Thai）[5]の協力を得て，2007年5月から2008年8月の間に計5回の現地調査を実施した。また2013年現在も継続して現地の状況の観察を続けている。タイに居住するミャンマー人の多くは，不法滞在者であるため，ミャンマー人に限らず，タイ人である彼らの雇用主や家主も，外部からの訪問に対して警戒心が非常に強い[6]。そのため調査においては，現地住民からの信頼の高いNGOのミャンマー人スタッフの同行と協力が不可欠であった[7]。聞き取りでは英語およびタイ語，ミャンマー語を用いて調査を実施した。文献資料はラックスタイ提供資料のほか，チュラロンコン大学ARCMおよび同大学の図書館，サムットサーコーン県労働局などで収集した。

## Ⅱ　タイにおけるミャンマー人の流入経緯

### 1．タイにおける外国人の流入と分布

タイは1987年から金融危機に見舞われた1997年までの10年間，毎年10％前後の高度経済成長を経験しており，以来，隣国のミャンマー，ラオス，カンボジアから大量の外国人労働者を受け入れるようになった（浅見，2003）。1992年に隣国3国からの不法外国人労働者の管理制度が改善され，労働許可証の登録をした者の統計が取られるようになり（清川，2010），2001年には99,656人，2004年には814,247人，2008年時点では710,468人が登録されている（Tailand Ministry of Labour）。しかしこれらの統計は，強制送還された外国人労働者が差し引かれているほか，現在でも登録していない者が非常に多くいるため，推定200万人の外国人労働者が在住するとされる。またすべての外国人労働者の国籍別人口統計で，常にその70％以上がミャンマー人で占められている。図1は2008年の外国人の分布を示している。首都バンコクおよびその近郊の県，そしてプー

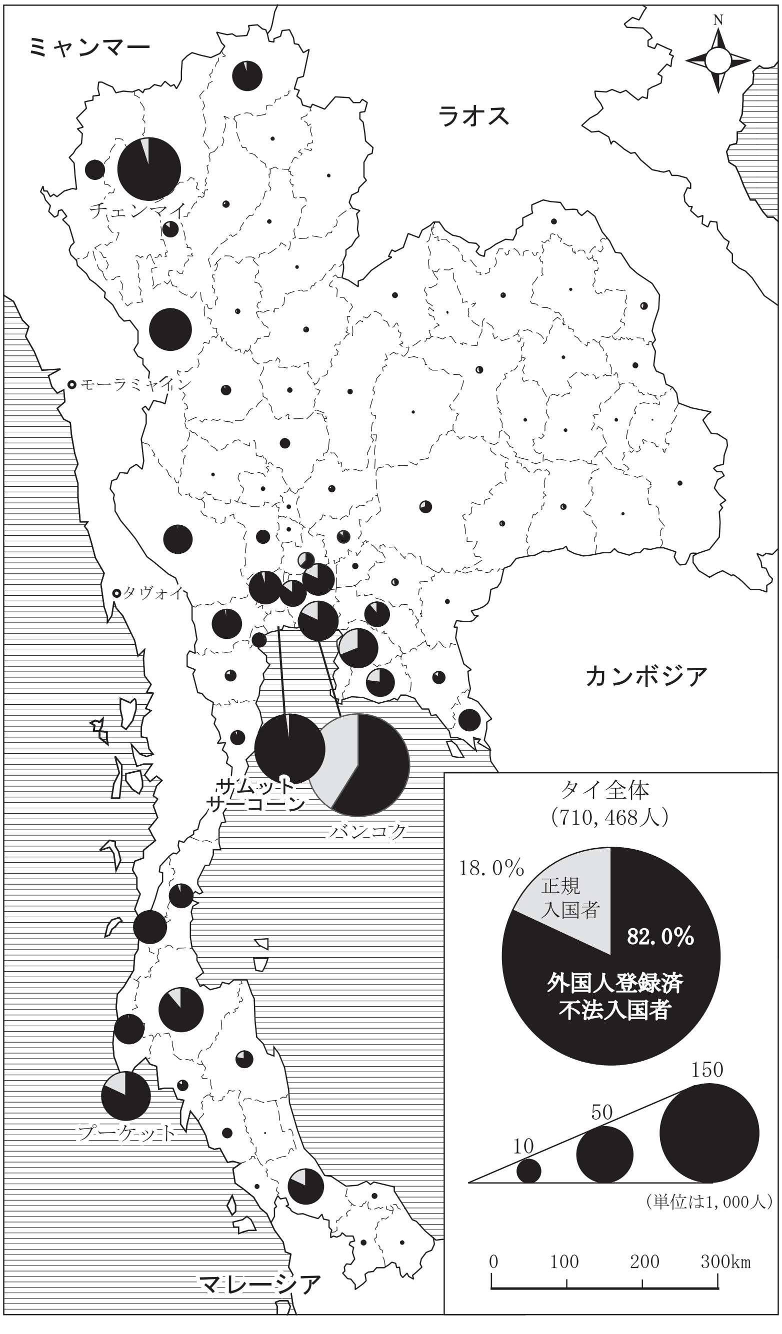


図1　タイにおける外国人の分布（2008年）

（Thailand Ministry of Labour 統計データにより作成）

ケット県等の南部の県には正規入国外国人の割合が多いことが分かる。しかし，ほぼすべての県において，外国人に占める不法入国者の割合が非常に多いことがみてとれる。タイ政府から発行された労働許可証を職種別にみると農業・畜産業に従事する外国人労働者が最も多く，続いてハウスメイド，建設業，水産加工業，漁業，その他となっている（Chantavanich and Vungsiriphisal et. al., 2007）。バンコクなどの都市部ではハウスメイドといったサービス業や建設業などの第二次第三次産業に携わる労働者が多く，北部地域では農業，南部地域では漁業といった第一次産業の仕事に就く者が多い。特にタイランド（シャム）湾に面したバンコク近郊では水産加工業の工場が多いため，外国人労働者が集中している。いずれの職種においても外国人の半数以上をミャンマー人が占めている。ミャンマーと国境を接している西部タイの諸県に外国人労働者の割合が多いことも，陸路や海路でミャンマー人が入国してきていることをうかがわせる。

### ２．タイにおけるミャンマー人およびそのエスニック集団

ミャンマーからの労働者が他の2国より圧倒的に多い理由は，タイの経済的発展によるプル要因だけでは説明することはできず，ミャンマー国内の状況にも目を向ける必要がある（Kerdsawang and Archavanitkul, 1997）。ミャンマーは1962年のクーデター以降，軍事政権により社会主義を標榜した政策が取られるようになった。それ以後，国民の生活は困窮化し，常に民主化を求める運動が続けられてきた。1988年，民主化運動が激化し，治安部隊による鎮圧で多くの市民の犠牲が払われることになった。この年を境に，軍政は市民への弾圧を強めながら，国内のエスニック集団への攻撃も開始するようになり，この状況は現在でも続いている。そのため，1980年代後半以降，一部のミャンマー人は難民として国外へ逃れ，またその他の大多数は抑圧された生活を避け，家族を支えるために，労働者として隣国のタイへ流出するようになったのである。

1983年を最後に実施されたミャンマーの国勢調査によると，ミャンマー国内におけるエスニック集団の比率は，主要民族であるビルマ（Burmese）人69.0%，シャン人8.3%，カレン人6.2%，ヤカイン（Yakhine）人4.5%，モン人2.4%，チン人2.2%，カチン人1.4%，カヤー（Kayah）人0.4%，その他のエスニック集団が5.4%となっている（伊東，2011：21-22）。Archavanitkul et. al.（1997）などの先行研究でも議論されているように，タイ国内の外国人労働者の民族的内訳について統計資料から推定することは容易ではない。しかし，タイに入国しているミャンマー人たちの情報によると，タイにおけるミャンマー人には，ビルマ人以外のエスニック集団出身者が少なくないことが伺える。これはミャンマー政府によるエスニック集団への締め付けが厳しいため，ビルマ人より強いプッシュ要因が働いていると考えられる。

## Ⅲ　ミャンマー人コミュニティの適応様式

### １．サムットサーコーン県におけるミャンマー人

サムットサーコーン県は，首都バンコクの西に隣接した面積872.4km$^2$の小規模県であるが，2008年の同県の総生産高は約3,528億バーツと全76県 中6位（Khormoon thaang bannanukrom khong horsamut haeng chaat, 2010：133）であり，国内でも有数の工業・産業地域である[8)]。漁業や水産加工業[9)]も盛んで，ミャンマー人労働者が多く集まる地域となっている。2008年時点で，サムットサーコーン県には74,531人の外国人が登録されており，そのうち約90%がミャンマー

人，約6％がラオス人，約2％がカンボジア人である。NGO関係者たちの推定によると，登録されていない者を含めると，およそ17万人のミャンマー人が同県に居住していると言われている。同県のタイ人人口は449,090人（2008年）であることから[10]，人口に占めるミャンマー人の比率は約27％と非常に高いことが分かる。

研究対象地域は，サムットサーコーン県の県庁所在地であるマハーチャイ町[11]およびその周辺地域である。マハーチャイ町では，二つのNGO組織がミャンマー人移民の生活支援を行っている。一つはミャンマー人児童の教育に重点を置いた組織であり，もう一つは移民の医療，人権，教育に重点を置いた組織である。本稿では，後者のNGO組織，ラックスタイの協力を得た。サムットサーコーン県ではラックスタイはミャンマー人の多く住んでいる地域に5カ所の支援施設を設け，そこを拠点に活動[12]をしている（図2）。施設には，医療スタッフがいる診療所と，子どもの教育に重点を置く学校[13]，またはその両方の役割を担うものがある。多くのミャンマー人は不法滞在者であるため，タイの一般的な施設を利用できないことが多い。そのためこれらの施設は，ミャンマー人がタイ社会で生活する上で重要な役割を果たしている。

これらの施設の他に，ラックスタイは県内のミャンマー人が集住している地区を直接訪れ，医療支援を行う移動診療[14]も実施している。主に，遠距離のためミャンマー人がラックスタイの施設に行くのが難しい地区，もしくは乳幼児を持つため移動が困難な女性が多く居住する場所などを重点的に訪問している。ラックスタイ施設周辺のミャンマー人の居住者数は50人程度を下限に，大規模なものでは数千人規模であるのに対して，移動診療の訪問地は50人以下程度のミャンマー人しか住んでいない地区である。筆者は11カ所のミャンマー人集住地区を訪れ，スタッフと共に景観観察とミャンマー人居住者に聞き取りし，それぞれの地区のミャンマー人の社会属性[15]・居住様式・就業形態・生活様式の類似点と差異を調査した。以下の第2節から第4節では，典型的な特徴がみられる集住地区である，ターチャローム（Tha Chalom）地区，サパーンプラー（Sapaan Plaa）地区，タラートクン（Talat Kung）地区の3地区[16]でのミャンマー人の適応の特徴を記述し，第5節でコミュニティ全体としての適応様式に関して考察する。

## 2．ターチャローム地区

現地のミャンマー人によると，ターチーン川右岸のターチャローム地区には5,000～6,000人のミャンマー人が住んでいるとされている。この地区のミャンマー人は，タイ人雇用主の敷地内のアパート等に住んでいる。一つのアパートにおよそ10～20世帯が住んでおり，このような小規模な集住形態が地区内には数多く点在している。男性の主な職業は漁船乗組員であり，数日から数週間，アパートを離れて船上で過酷な労働に従事する者が多い。雇用主がターチーン川沿いの敷地を所有している場合，川に面した杭上家屋式のアパートにミャンマー人は居住することになる。アパートからは直接桟橋が川に伸びており，ミャンマー人たちはアパートの敷地から直接停泊している雇用主の船に乗船することができる形になっている（図3）。この地区のミャンマー人の年齢は30～60歳代の者が多く，他の地区のミャンマー人と比べると，家族を同伴して移住してきたケースが多い。なかには，1990年代から住み続けているという者も少なくない。これらの夫婦ではタイ在住中に産んだ子どもが非常に多く，なかには在タイ三世代目も増えつつある。そのため県内で最もミャンマー人の子どもが多い地域であり，ラック

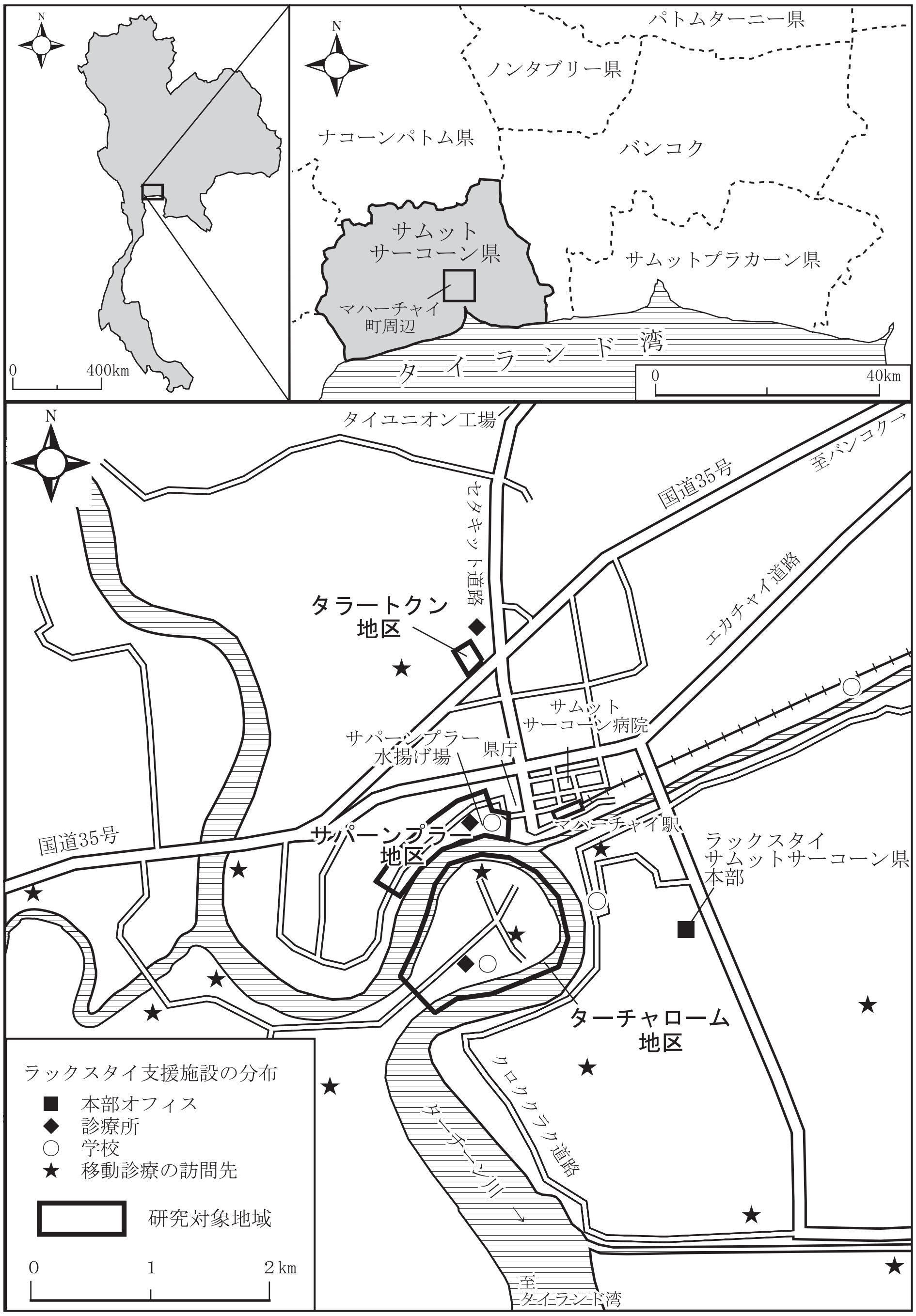


図2　研究対象地域（2008年）

（現地調査により作成）

図3　ターチャローム地区の桟橋上で網の手入れをしているミャンマー人漁船乗組員

（2008年7月撮影）

スタイが子どもの支援に最も力を入れている対象地区となっている。

ターチャローム地区の最大の特徴として，ミャンマー・タヴォイ出身のビルマ人が多く住んでいることが挙げられる。一つのアパート内にタヴォイ出身のビルマ人のみ居住しているという事例もよくみうけられる。これはタヴォイ出身者がチェーン・マイグレーションによって，同じ地域出身者を引き寄せ続けた結果，他地域出身者や他のエスニック集団の出身者が住まなくなったためといわれており，ミャンマー人のエスニック集団間の住み分けが進んでいる地域であるといえる。ターチャローム地区以外にも，このように一つのエスニック集団が集中的に居住する地区は，クロククラク道路付近のモン人集住地区や，セタキット道路沿いのタイユニオン工場付近のビルマ人集住地区など，いくつか存在する。

### 3．サパーンプラー地区

ターチーン川左岸は，サパーンプラー水揚げ場[17]を中心とする主に水産加工場が隣接する地帯となっている。本稿ではこの周辺をサパーンプラー地区と呼ぶ。

筆者による現地のミャンマー人たちへの聞き取りによれば，この地区におけるエスニック集団の構成は，ビルマ人が約30％，モン人が約30％と全体の半数以上を占め，その他にカレン人，シャン人，カチン人，ヤカイン人など，多様な集団が混住している。

この地区のミャンマー人は，主に工場敷地内やタイ人が所有するアパート等に居住させられているため，景観的観察からミャンマー人の集住を認識することは難しい。就業形態は，水揚げ場と水産加工場が地区内にあることから，主に漁船乗組員や水揚げ場内での肉体労働，そして水産加工場の作業が中心である。水産加工場の仕事は女性でも行うことができるため，この地区では就労しているミャンマー人女性を多くみることができる（図4）。ターチャローム地区のミャンマー人が全体的に既婚者であったのに対し，この地区では既婚者は全体の半分ほどで，残りの半数は10～20歳代の若いミャンマー人である。就労している既婚女性の場合，日中は子どもをラックスタイの学校に預けている。

表面的にはミャンマー人向けの店があるようには見えないが，サパーンプラー地区ではミャンマー人にとっての必需品や日用品を購入することができる。水揚げ場の敷地内で週3回開かれる定期市では，タナカー[18]やラペットウ[19]など，ミャンマー人向けの日用品や食材，ミャンマー語版のビデオ CD が売られており，その度に多くのミャ

図4　ターチーン川沿いの水産物加工場でエビの殻むき作業をしているミャンマー人

（2007年7月撮影）

図5　サパーンプラー地区の定期市で買物をするミャンマー人女性

（2008年7月撮影）

ンマー人が買物に訪れている（図5）。またキンマ[20]の露天売り[21]が地区内を毎日往来していることや，ミャンマーに帰国した際にミャンマー風ブラウスのエンジーや巻きスカートのロンジーといったミャンマー服を大量に仕入れて，近所のミャンマー人に販売している住民がいるなど，タイ社会からは不可視な形でエスニック・ビジネスが行われており，生活様式に多様性がみられる。

### 4．タラートクン地区

タラートクン地区は，1990年代に建設された水産加工作業場兼水産業労働者用の居住施設のユニットである。タイのテレビメディアなどでも取り上げられるほど，タイで最も有名なミャンマー人集住地区の一つである。2008年時点で，4,000～5,000人のミャンマー人が住んでいると居住者たちは推定している。

地区の中央には労働者が居住するための4棟のアパートが並び，奥には商業施設用の平屋の建物が1棟，その周りを作業場がL字型に設けられている。この地区では主に水揚げされた鮮魚の仕分け作業や県内で養殖されたブラックタイガーの殻やはらわたを取り除く作業をする場であり，敷地内に居住するミャンマー人の多くはそれらの仕事に従事している。一方，地区外で就業している者も多い。例えば，漁船乗組員や水産加工労働者をはじめ，水産業以外の精密機械を生産する工場に勤めている者，NGOラックスタイの正社員やボランティア・スタッフ，通訳，技術者なども居住している。これはタラートクン地区が町の中心部に近く，主要国道沿いに立地しているため，水産業以外の職場へのアクセスが容易であることが一つの要因であると考えられる。

タラートクン地区におけるエスニック集団の構成上の特徴もサパーンプラー地区に類似しており，ビルマ人が約30％とモン人が約30％と多数を占め，残りの40％をカレン人，カチン人，シャン人，チン人，ヤカイン人等が占め，様々なエスニック集団が混住している。

年齢層は10～30歳代と若い単身者が大多数であり，既婚者は非常に少ない。この地区の男女数はほぼ等しく，就労している若い未婚女性が非常に多いことが特徴である。また地区内では住民の入れ替わりも早い。これは，まだ入国したばかりで職がないミャンマー人が最初にこの地区に移住し，タラートクンで生活しながら仕事をし，タイ社会に徐々に順応した後に，他の地区に移るといったパターンがあるためである。このことから，ライフステージに応じて地区間を移動するミャンマー人がいることが伺える。その一方で，少数ではあるが長期滞在者も居住しており，これらのミャンマー人によるエスニック・ビジネスをこの地区で見ることができる。長期滞在しているミャンマー人は，タイ国籍を取得した者，タイ人と結婚した者，子どもがタイ国籍を取得しバンコクで安定した職についている者等，タイ社会で安定した地位を獲得している。

地区内には飲食店，飲物店，喫茶店[22]，キンマ店，八百屋，薬屋，衣料品店，美容院，本やビデオ

CDを売る店，日用雑貨店等やその多様な商品を商う万屋的な店舗があり，その多くがミャンマー人関連のビジネスである（図6）。地区の入り口や作業場に近い，人の出入りが多い場所には主にタイ人が経営する店が並んでいるが，地区の奥に進むにつれ，ビルマ人，モン人，カレン人，タイ国籍

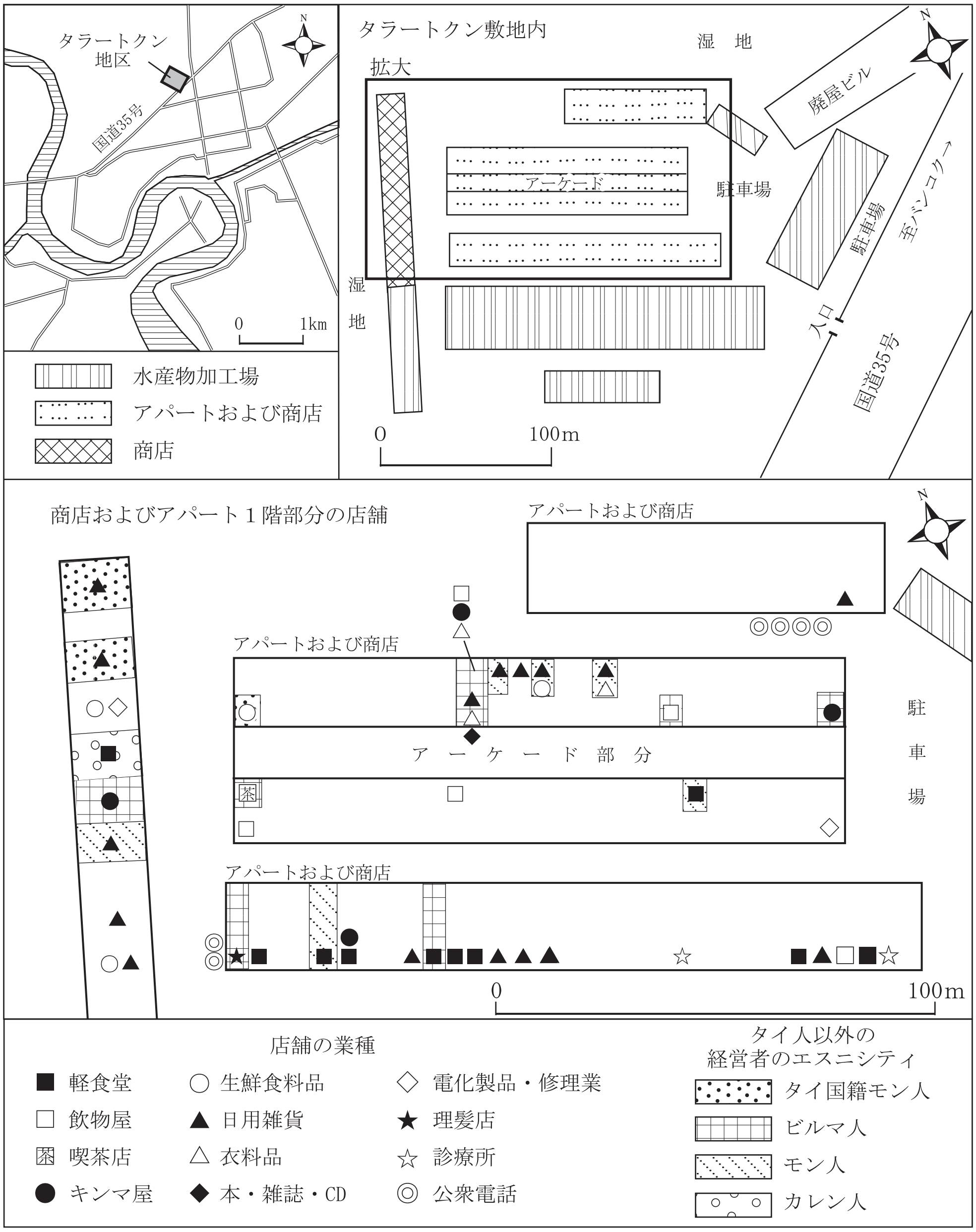


図6　タラートクン地区内の店舗の職種および経営者のエスニシティ（2008年）

アパートの空白部分は部屋.

（現地調査により作成）

のモン人といった多様なエスニック集団の経営者による店が多くなっている。中でも特筆できるのが他の地区では見られないミャンマー式の喫茶店の存在である。メディアの情報規制が強化されているミャンマーにおいては，終業後等に皆が集う喫茶店でのお茶を飲みながらの会話や口コミは娯楽であると同時に極めて重要な情報源でもある。タラートクン地区においても，個人の消息から政治や経済の内容に至るまで喫茶店で情報交換が行われている。早朝の仕事が一段落した朝5～6時頃が最も賑わう時間帯となっている。

また，タラートクン内で売られているミャンマー産の日用品や食料品などの物産は，県内で最初にタラートクンに配送されるため，最新のものを安価で購入することができる。タラートクンで売られているミャンマー製品は，県内の他地区の露店やバンコクへも転売されており，その場合商品の値段はタラートクンからの距離に比例して高くなっている。このようにタラートクンにはミャンマー産の物品等が最も早くもたらされ，活発な情報交換の拠点となっているため，他の地区から定期的に通うミャンマー人も多い。

## ５．ミャンマー人の適応様式

以上のように本章では三つの地区を事例とし，各地区におけるミャンマー人の適応様式の差異について記述してきた。地区ごとに，場所の条件が居住様式と就業選択の幅に影響しているため，異なった属性のミャンマー人がそれぞれの地区に住み，異なった適応様式を展開していることが分かった。ターチャローム地区のような，市街地の周辺部に位置し，小規模な住み込み型の居住様式および，限定された職業についているミャンマー人が居住している場所においては，一つのエスニック集団が集中し，長期的に家族と共に滞在する傾向がみられた。

サパーンプラー地区のような職住近接型の工場隣接地区では，若い未婚者と既婚者の，多様なエスニック集団が集まっていることが確認できた。一方，タラートクン地区のように市街地の中心部に近い，交通の利便性が高い場所にある大規模居住地区においては，非常に若い単身者が最も多いものの，一部ではタイ社会に適応した30・40歳代以上の者もみられ，職業も勤務との隣接性にこだわらない，多様な職種とエスニック集団のミャンマー人が集まっていることが分かった（表1）。

表1　サムットサーコーン県におけるミャンマー人の適応様式

| 地区 | ターチャローム | サパーンプラー | タラートクン |
|---|---|---|---|
| 場所 | 市街地周辺部 | 工場地帯 | 中心市街地付近<br>交通利便性が高い |
| 居住 | 小規模・住み込み | 中規模・職住隣接 | 大規模・職住半隣接 |
| 就業 | 漁船乗組員中心 | 漁船乗組員<br>水産加工場労働者<br>中心 | 多種多様 |
| 年齢構造 | 30～60歳代 | 10～30歳代 | 10～60歳代 |
| 世帯構成 | 既婚者中心 | 既婚者・未婚者 | 未婚者中心 |
| エスニック構成 | 単一民族 | 多民族 | 多民族 |

（2008年の現地調査により作成）

それぞれの地区のエスニック構成だけに着目すると，市街地周辺部にあたる地区では，1地域出身の者だけから成り立っているのに対し，交通の利便性の良い市街地中心部付近の集住地区では，ミャンマーの主要民族であるビルマ人と共に，様々なエスニック集団出身者が混住しているという違いがみられる。杉浦（2011）はエスニック・タウンを，①萌芽期，②総合型エスニック・タウン期，③エスニック・タウン期，④衰退期（ないしは転換期）とそれぞれ性質と機能を異にする4つの段階を経て生成・変容し，消失に至ると想定しているが，2008年時点のサムットサーコーン県におけるミャンマー人のコミュニティでは，タラートクン地区をエスニック・ビジネス集積域，そのほかの地区をエスニック集団集中居住域とした萌芽期にあるといえる。

タラートクン地区は様々な人やミャンマーからの物品，情報が集まる交流中枢の機能を果たしているだけでなく，タイに入国したばかりのミャンマー人を受け入れる初期定着地としても機能している。更に，当初タラートクン地区に居住していた者も，タイ社会への適応段階に応じて，徐々に他地区への二次的移動をするというパターンも一定数みられる。

市街地周辺の集住地区においては，職業やエスニック集団といった属性により，ミャンマー人内のエスニック集団の間でも空間的な住み分けが進んでいる。

このようにエスニック・タウン萌芽期にあるにもかかわらず，ミャンマー人のライフステージに応じた地区間の移住・移動や住み分けが進んでいることは，移住ミャンマー人内に多様なエスニック集団が存在することに起因していると考えられる。一般にエスニック・コミュニティは，民族組織が形成されコミュニティの社会的・文化的な絆を深めようとする一方，居住地は空間的に徐々に拡大分散し，ホスト社会に同化する傾向にあるが，サムットサーコーン県におけるミャンマー人においては一般的なパターンに反する傾向を含んだ特有な適応様式を示していることを確認できた。

## Ⅳ　おわりに

本稿では，近年タイに増加しているミャンマー人の，ホスト社会における適応様式の実態を，彼らの社会属性・居住様式・就業形態・生活様式等に着目しながら分析した。調査対象地域はタイでも最大規模のミャンマー人が居住するサムットサーコーン県中心部とした。その結果，明らかになったことは以下のようにまとめることができる。

1980年代後半以降，タイにおいてミャンマー人が増加した背景には，ミャンマーの軍事政権による市民生活の圧迫がプッシュ要因となり，出稼ぎなどで海外へ流出するミャンマー人が増加した事情および，タイの経済成長に伴う労働力需要の高まりといったプル要因がある。ミャンマー人労働者は，主にタイ・ミャンマー国境沿いの地域および，首都近郊の労働力需要の高い地域に多くみられる。水産業や水産加工業といった第一次第二次産業の労働力を多く必要とするサムットサーコーン県も，ミャンマー人移民が多く集住する地域となっている。

サムットサーコーン県のミャンマー人を支援する組織として，タイのNGO組織が存在する。NGOのミャンマー人スタッフによる持続的な支援活動により，NGOはミャンマー人移民が生活を維持していく上で重要な存在の一つとなっている。ミャンマー人移民への聞き取りにはNGOのミャンマー人スタッフの援助を受けて進められたが，それを通じてミャンマー人のコミュニティが，ターチャローム地区等の周辺部の小規模居住

地区，サパーンプラー地区等の工場地帯の中規模居住地区，タラートクン地区等の交通の利便性が高い場所にある大規模居住地区の3種類に区分できた。

それぞれの地区では異なった社会属性・職業のミャンマー人が住み分けを行っており，エスニック構成に着目すると，市街地周辺部にあたる地区では，1地域出身のものだけから成り立っているのに対し，市街地中心部に近い集住地区では，様々なエスニック集団出身者から成り立っているという違いがみられる。市街地周辺部ではミャンマー人内部の社会属性や職業による住み分けがみられる一方，市街地中心部にある大規模居住地区では，ミャンマーから入国したばかりの者を受け入れ，その適応を扶助する役割も果たしている。大規模居住地区での生活を経てタイ社会への適応度合が高まったミャンマー人の一部は，ライフステージに応じて他地区へ移動する。また，様々な情報やミャンマーからの物資が行き交う場所としても，地域全体のミャンマー人にとって重要な拠点となっていることが明らかになった。

## [付記]

タイにおける調査の際には，調査地の皆様およびNGO組織ラックスタイのスタッフの方々に多大の御協力・御支援を頂きました。本稿を作成するにあたって，山下清海先生をはじめとする筑波大学大学院生命環境科学研究科の先生方に懇切な御助言を頂きました。また，英文要旨の作成にあたってはThompson Rivers UniversityのThomas Waldichuk先生にお世話になりました。心より感謝申し上げます。本稿は，2008年度筑波大学大学院生命環境科学研究科に提出した修士論文の一部を加筆・修正したものであり，その内容は2009年3月の日本地理学会春季学術大会（於：帝京大学）にて発表した。

## 注

1）本稿ではすべてのミャンマー出身者を「ミャンマー人」とし，その中にみられるエスニック集団の人々に関しては，エスニック集団名に「人」をつけて表記し区別した。

2）入国管理法には，不法入国した者が帰国の費用を工面するために，強制送還されるまでの間働くことを認めている条文がある。それを拡大解釈することによる措置であるが，法的にはあくまで不法入国者・不法滞在者という位置づけである。

3）2008年時点のサムットサーコーン県におけるミャンマー人社会では，ミャンマー人による民族組織は設立されておらず，ミャンマー人の就業を助けるような同胞による仕組みも確認することができなかった。そのため同県のミャンマー人のホスト社会への適応過程はまだ「戦略」を行っている段階には至っているとは言えない。そのため本稿では「民族組織」を省いた，「居住空間」と「就業選択」のみに着目している。

4）ブラーシュ（1940）は生活様式を「人が環境に適応した道具を有する社会の型」であると定義している。

5）ラックスタイは，1997年にタイの法律のもと設立されたNGO組織である。その活動の歴史は，1979年に国際協力NGO CAREタイ事務局が設立され，タイ・カンボジア国境地帯でのカンボジア難民の支援を始めたことに始まり，その後，支援活動が国内全土に広がり，現在のラックスタイの基盤を築いた。自然環境保全，持続可能な生活の支援，医療，教育そして若者の育成といった五つの原則のもと支援活動をしている。タイ社会において弱者である外国人やエスニック集団にも重点を置いており，ミャンマー人への医療援助，HIV予防教育，職業訓練支援，子どもの教育，緊急時の救助活動等も行っている。2008年時点でタイ国内の32県に支部を持ち，活動地域の分布は，バンコクを除いた外国人労働者の多い地域の分布とほぼ重なる（Raks Thai Foundation）。

6）現地のタイ人であっても，ミャンマー人に話しかけても無視されてしまう。

7）著者は，2004年にミャンマーからタイに入国以来，長期にわたってサムットサーコーン県のNGO組織で活動し，現在ターチャローム地区オフィスの責任者を務めるミャンマー人女性スタッフと共に調査を行った。本稿のミャンマー人コミュニティに関する記述は，彼女をはじめとする現地のミャンマー人たちの長年の観察によるものと，聞き取りから得られた情報によるところが多い。

8）サムットサーコーン県の生産工場数は2008年時点

では6,606カ所である。サムットサーコーン工業局提供資料によると，2007年時点で同県に登録されている，5馬力以上の機械を有する工場数は4,342である。

9) Thant（2005）によると県内には2,900ヵ所の水産加工場が存在する。

10) サムットサーコーン県ウェブサイトによる（Samut Sakorn Province Thailand）。

11) サムットサーコーン県ウェブサイトによると，中心市街地であるマハーチャイ町は，14世紀，前期アユタヤ王朝の王により第4の都として治められていた。当時は「ターチーン」と呼ばれており，中国を始めアジアの主要な都市と貿易を行う要衝として栄えていた。ターチーンはタイ語で「中国の港」という意味で，その名の通り中国からの貿易船が頻繁に往来していたことが伺える。現在ではターチーンはマハーチャイに流れる川の名前となっている。

12) 各支援施設には約5人のタイ人とミャンマー人スタッフが配属されている。ミャンマー人スタッフはみな医療や歯科等の特化された専門資格を有している。これらのスタッフの他，ミャンマー人コミュニティからアルバイトやボランティアとして参加している者もおり，最寄りのミャンマー人居住地区でのミャンマー人の生活状況や問題の詳細をラックスタイに伝え，それぞれの場所に適した支援活動についてスタッフと一緒に判断する役割を担っている。

13) 教育においては，幼稚園クラスの2レベルと，小学校1～5年の全7段階に分け，それぞれの学年に合ったミャンマー語，タイ語，英語，算数（ミャンマー語とタイ語でそれぞれ別）を教えているほか，いつタイ社会への受け入れもしくはミャンマーへの帰国が決まっても順応できるように，社会常識や文化，礼儀作法なども一通り教育している。また，県内にはモン人が多いこともあり，モン人の子ども向けにモン語を教える教材なども備えられている。一食10バーツの給食を除き，これらすべては無償で提供されている。

14) 移動診療は，ラックスタイとサムットサーコーン病院が連携して行っている医療活動である。両スタッフ併せて10名ほどが，毎週訪問先のミャンマー人の診断，薬の処方，予防接種，子どもの定期検診等を，約3時間かけて無料で行っている。2008年1～9月には計36回，28カ所で行われた。

15) 社会属性には性別，年齢，世帯構成，所属エスニック集団等が含まれる。

16) 本稿で用いているそれぞれの地区の名前は，現地で人々が実際に使っている地域の呼称を適用しているため，必ずしも同じ町区画レベルの範囲とは限らない。

17) サパーンプラー水揚げ場の敷地内にはターチーン川に面した60の作業スペース，3棟の小規模なオフィスビル，食堂などが備えられている。主にターチーン川左岸沿いおよび近隣の水産加工場が利用する水揚げ場となっている。

18) タナカーとは，タナカーと呼ばれる木の粉に水を足して作るミャンマーの日焼け止め効能をもつ化粧品のことである。男女とも顔や体に塗る習慣があり，タナカーの木だけでなく製品化されたタナカーパウダーも人気の商品である。

19) ラペットウとは，発酵させた茶葉に油を混ぜ，ピーナッツやゴマ等と一緒に食するミャンマーのおつまみである。

20) キンマとは東南アジアで広く親しまれている伝統的な噛みタバコの一種である。タイでは1940年代にピブーン政権が禁止したのちに急速にすたれていったが，ミャンマーでは今でも一般的に親しまれている。

21) 移動式の小型の手押し車の上に商品を載せ売り歩いているが，日差しが強くなり人の往来が少なくなる日中などには移動して見かけなくなる。

22) 屋根はあるが壁がないため，半分露店のような喫茶店となっている。この喫茶店ではタイとは異なるミャンマー式のミルクティーやカフェオレを飲むことができ，軽いスナックを一緒に食べることもできる。

## 文　献


浅見靖仁（2003）：国際労働力移動問題とタイ－研究動向と今後の課題．大原社会問題研究所雑誌，**530**，22-43.

伊東利勝編（2011）：『ミャンマー概説』めこん.

貝沼恵美・小田宏信・森島 済（2009）：『変動するフィリピン 経済開発と国土空間形成』古今書院.

清川　梢（2010）：ラオスの移動労働者－世界労働市場と移動労働者の生活戦略．櫻井義秀・道信良子編『現代タイの社会的排除』67-101，梓出版社.

杉浦　直（2011）：エスニック・タウンの生成・発展モデルと米国日本人街における検証．季刊地理学，**63**，125-146.

橋本泰子（2007）：タイにおけるミャンマー人労働者のエスニシティとナショナリティ．佐々木　衞編『越境する移動とコミュニティの再構築』139-155，東方書

店.

藤井　勝・レーワット，S.（2007）：タイ中部における越境移動と地域社会－チョンブリー県を事例として．佐々木　衡編『越境する移動とコミュニティの再構築』123‑138，東方書店.

ブラーシュ，P.著，飯塚浩二訳（1940）：『人文地理学原理』岩波書店．Vidal de la Blache, P.（1922）：*Principes de Géographie Humaine*. Armand Colin.

矢ケ﨑典隆・二村太郎（2005）：アメリカ大平原ガーデンシティにおける東南アジア系社会とローカルホスト社会．新地理**53**(2)：33‑51.

Aung, T. T.（2007）：Myanmar Migrant Society in Bangkok Metropolis and Neighboring Region. 佐々木　衡編『越境する移動とコミュニティの再構築』157‑172，東方書店.

Chantavanich, S., Laodumrongchai, S., Eksaengsri, N., Ruengrojpitak, P., Vungsiriphisal, P., Srakaew, S. and Pansab, P.（2007）：*Assessing the situation of the worst forms of child labour in Samutsakhon*. Asian Research Centre for Migration, Institute of Asian Studies, Chulalongkorn University.

Chantavanich, S., Vungsiriphisal, P. and Laodumrongchai, S.（2007）：*Thailand policies towards migrant workers from Myanmar*. Asian Research Centre for Migration, Institute of Asian Studies, Chulalongkorn University.

Thant, T. A.（2005）：*Factors related to occupational accidents among Myanmar migrant workers at Samut Sakorn Province, Thailand*. Faculty of Public Health, Mahidol University.

Yagasaki, N.（2003）：Adaptive strategy of Japanese Immigrants and occupational sequent occupande in the development of fresh produce marketing in Los Angeles. *Geographical Reviw of Japan*, **76**(12), 894‑909.

Archavanitkul, K., Jarusomboon, W. and Warangrat, U.（1997）：*Khwaamsaabsoon lae khwaamsabson: ruang khon khaam chaat nai prathate Thai*（錯綜と混乱：タイへの外国からの入国者）．Institute for Population and Social Research, Mahidol University.（タイ語）

Kerdsawang, P. and Archavanitkul, K.（1997）：*Kaanlamerd sitthi manussayachon nai prathate phamaa: jaak phuuliiphai suu raeng-ngaan khaam chaat*（ミャンマーにおける人権侵害：難民から外国人労働者へ）．Institute for Population and Social Research, Mahidol University.（タイ語）

Khormoon thaang bannanukrom khong horsamut haeng chaat（国立図書館資料目録）．（2010）：*Tualeek tongruu khong changwat* 2553‑2554.（各県の知っておくべき統計2010‑2011年）．Alpha research limited company.（タイ語）

Saisunthorn, P. K.（1997）：*Kaan khaomaa nai prathate thai khong khon taang daao phua thamngaan: khor samruat thaang kotmaai panhaa lae thaangluak nayobaai*（就労目的の外国人のタイへの入国：関連法規，諸問題および政策の選択肢に関する調査研究）．Institute for Population and Social Research, Mahidol University.（タイ語）

Raks Thai Foundation. http://www.raksthai.org/［Cited: 2013/4/20］

Samut Sakorn Province Thailand. http://www.samutsakhon.go.th/index_m.htm［Cited: 2008/12/1］

Thailand Ministry of Labour. Labour Research Database, Office of Permanent Secretary, Research Divison: Policy and Strategy Bureau. http://research.mol.go.th/［Cited: 2012/11/1］

# The Adaptive Style of Myanmar Migrants in Samut Sakhon Province, Thailand

ONOZAWA Yasuko
Graduate Student, University of Tsukuba

Myanmar migrants in Thailand have been increasing in number since the late 1980's, due to the rapid economic growth of Thailand where the demand for labour has increased enormously. Also, the start of the Myanmar military regime in 1988 became the main push factor for many Myanmar citizens to emigrate abroad. Large numbers of Myanmar migrants can be observed in Bangkok, its neighboring prefectures and border prefectures with Myanmar. In Samut Sakhon Province, located in the suburbs of Bangkok, due to the high labor demand from primary and secondary industries, such as fisheries and marine product processing industries, the largest Myanmar communities in Thailand have emerged.

The aim of this paper is to analyze the adaptive style of Myanmar migrants in local Thai areas, using case studies of Myanmar communities in the central parts of Samut Sakhon Province. Thus, this study has paid special attention to the Myanmar migrant's social attributions, residential patterns, occupational preferences and modes of life.

Myanmar residential patterns were examined by dividing them into three types: small-scale residential areas at peripheral sites, medium-scale residential areas in the industrial zones, and the large-scale residential area in the town centers. Each type of residential area is different, consisting of Myanmar migrants of diverse social attributes and occupations. In the small-scale residential areas, there was a tendency for the communities to consist mainly of one ethnic group, which is due to the chain-migration of the same ethnic groups from Myanmar. On the other hand, in the medium-scale and the large-scale residential areas, there is a diversity of Myanmar migrants in terms of ethnic origins as well as occupations. However, some of the Myanmar migrants move out from the large-scale residential area to live in other areas, according to their adaptive stages to Thai society. Moreover, large-scale residential area functions as an important center to support the Myanmar migrants as a whole, because many kinds of information and products from Myanmar are concentrated and available here.

**Keywords**: Myanmar migrants, immigrant community, adaptive style, Thailand, Samut Sakhon Province